

第39回高知女子大学看護学会 ワークショップ

ワークショップ1：

病と生きる人の語りから「乳がんとともに生きる」



【コーディネーター】

池田久乃

(高知医療センター がん看護専門看護師、
34期生、修士3期生)

弘末美佐

(高知県立大学看護学部 がん看護専門看護
師、修士10期生)

【企画の意図】

悪性腫瘍の治療を行いながら生活する方の語りから、看護にできること、看護がなすべきことについて参加者と一緒に考えていく。

【話題提供者の紹介】

青木美保氏

(We Can Fight (ウィメンズ・キャンサー・
ファイター・サポート) 主宰、34期生)

高知女子大学を卒業後、大学病院の看護師、企業保健師、衛生管理者を経て、埼玉県立がんセンター腫瘍診断・予防科で看護師・遺伝カウンセラー(お茶の水女子大学大学院 遺伝カウンセリングコース修了)として現在、活躍されている。

青木氏は、40歳のとき左乳がんに罹患され、治療過程で感じた疑問もあり、米国ジョンズ・ホプキンス・ブレストセンターを視察した。その際、リリー・ショックニーさんの著書に出会い、「生きるための乳がん」(三一書房、2008)を翻訳・出版、さらに「再発・転移性乳ガンを生きるための100の質問」(彩流社、2010)を編訳・出版されている。

帰国後、乳がん女性のためのボランティア団体「We Can Fight」(ウィメンズ・キャンサー・ファイター・サポート)を設立し、積極的なボランティア活動もされている。

【話題提供内容の概要】

青木氏からは「乳がんと生きるわたしのストーリー」として、診断前からの体験や思いが語られた。『乳がんは何年経過しても再発の可能性が否定できず、再発予防のための治療がまだ続いていることを、周囲の人はなかなか理解できない』などの語りとともに、『治療が終わり、日常を取り戻すことが出来たことに感謝し、喜んで、日常に戻るべきなのです(リリー・ショックニー)』という言葉の紹介があった。そして、『乳がんという体験が、わたしに新しい道を開き、前に進む勇気をくれた』と語られ、希望を失わず、前に進む勇気を、ご自身の体験を通して話題提供していただいた。

【交流会でのディスカッション内容】

参加者の中には、がんの闘病生活を支える家族の立場でご自身の思いを語られたり、がん看護に携わる看護職として、がんを闘う患者さんやご家族にどのような情報提供をすればいいのかなどの質問があり、活発な意見交換がされた。また、乳がんに関しては、遺伝性乳がんの考慮も必要であるため、遺伝看護に関する意見もあり、参加者各々が所属する場でどのような関わりができるのか真剣に語り合った。

ワークショップ2：

認知症のケアを提供する人の語りから



【コーディネーター】

松 永 智 香

(社会医療法人近森会近森病院総合心療センター看護部長、51期生、修士8期生)

【企画の意図】

認知症の患者をとりまく医療、そしてケアを提供する側の思いやジレンマと継続していく看護について考えたり、話し合ったりする機会とする。

【話題提供者の紹介】

安 本 孝 子 氏

(グループホーム芸西一星の見える丘一所長、24期生)

藤 田 冬 子 氏

(高知県立大学看護学部 老人看護専門看護師、博士5期生)

【話題提供内容の概要】

安本氏は、駐在保健師として長年ご勤務されていた。そのような経験を踏まえて、医療側と福祉側の連携の重要性や必要な情報についてお話いただいた。藤田氏は、老人専門看護師としての視点から、認知症のケアに関する科学知を活用した看護の実践について語っていただいた。

【ワークショップでのディスカッション内容】

参加者の9割以上が急性期で勤務されている看護師であり、居宅で生活されている方が病気になって急性期に入院してきた際の看護の大変さや看護師としてのジレンマなどを共有することになった。一時的に患者を受ける側の急性期領域看護師も、一時的に急性期領域に患者を送る福祉側の看護師も、患者が尊厳を守られ、安全で最適なケアの提供を受けることができることが最優先であると考えていることが確認された。急性期という治療環境にありながらも、環境の工夫や自分たち自身のスキルで、満足の大きい看護を提供したいと考えている。その人らしさを支援しながら、急性期医療を効果的に効率的に提供するためには、医療側と福祉側の連携が重要であり、欲しい情報を共有する場面や時間を確保する必要性を感じた。

高知女子大学の卒業生と卒業生がお世話になっている病院の管理者がご参加くださり、充実した時間をもつことができた。

ワークショップ3：

地域での生活を支える人の語りから



【コーディネーター】

中 井 弘 子

(高知県健康政策課部中央東福祉保健所保健師、29期生)

北 村 真由美

(高知市保健所地域保健課保健師、34期生)

【企画の意図】

高齢の方や障がいを持つ人たちが安心して暮らせるようにと、地域の人が集い支え合っている「住民が元気な地域」の仕掛け人の語りから、自分たちで自分たちの生活を豊かにするということを一緒に考える。

【話題提供者】

山 中 雅 子 氏

(アテラーノ旭)

中 越 美 渚 氏

(高知市西部地域高齢者支援センター旭分室保健師、47期生、修士13期生)

【話題提供内容の概要】

山中氏からは、自分たちのまちをみんなの力で元気にしたいという想いから、憩いの場となるまちのお茶の間「アテラーノ旭」を立ち上げ、家事の手助けやお弁当の宅配など地域の高齢者や障がい者等への支援活動へと発展させてきた経過について語っていただいた。中越さんからは、高齢者の多い地域でのマップづくりを通して、地域の支え合いの状況や課題を共有し、「こんな町にしたい！こんなことしたい！」といった住民の思いの語り合いから、住民自身が

地域に新たなサロンを立ち上げるまでの経過について語っていただいた。

【ディスカッション内容】

話題提供者2人の語りを聞いたあと、参加者が感想を語り、意見交換を行った。その中で、「地域で活動を拡げるためのポイントは？」との質問には、「困りごとができた時に、みんなに『どうしようね？』とつぶやくと誰かから声があがる。そのつぶやきをキャッチすることが大切。そして、『それをやるためには、どんなことをやったらいいでしょうかね？』とすぐに話し合い、チャンスを逃がさないこと。」との助言があった。

また、「地域の世話焼きさんを発見するコツは？」との質問には、「たくさんの人とつながりを作ること。活動を地域に発信していると、一緒に頑張ろうという人が現れる」との話があった。地域における住民自身の支え合い・地域づくりの例として、看護学生にもぜひ話を聞かせたいとの声もあがり、とても好評であった。

ワークショップ4： 看護師の語りから



【コーディネーター】

畠山 卓也

(高知県立大学看護学部 精神看護専門看護師)

寺岡 美千代

(高知医療センター看護部長、修士11期生)

【企画の意図】

この企画は、参加者が自身の人生に重ねながら話題提供者の語りに寄り添っていくことで、

話題提供者の語りを単なる一個人の人生史としてではなく、参加者自身の経験を深化させ、一人の人として看護をどのように捉えているのか、看護師としてどのように歩んできたのかを考える機会とした。

【話題提供者】

大野 翔子 氏

(公益財団法人浅香山病院看護師、59期生)

関 正節 氏

(高知医療センター看護科長、修士11期生)

小笠原 麻紀 氏

(高知大学医学部附属病院リエゾン精神看護専門看護師、修士10期生)

【話題提供内容の概要】

ワークショップは、関氏と小笠原氏、そしてコーディネーターの寺岡氏の語りを土台にして進行し、大野氏は先輩たちの語りを紡ぎながら、新人看護師として体験している戸惑いに意味づけし、そして将来への希望を見いだしていた。

【ワークショップでのディスカッションの内容】

ワークショップには、専門看護師、認定看護師の他、この春就職したばかりの新人看護師など幅広い年代の方が参加されていた。ワークショップの前半は、看護師という職業を選択したこと、看護師という職業を続けていくうえで乗り越えてきた困難なこと、特に結婚、出産、育児という人生の契機と向き合いながら、職業人としてキャリアアップしていくことの意味やよりよい看護実践のために話題提供者が努めてきたことを共有した。そして、後半は、参加者一人ひとりが話題提供者の語りの理解から自分自身の先を見通したり、決意したりする機会になっていた。

あるベテラン看護師は、子育てと職業継続を両立しながら、自分自身の大学院進学について考えるきっかけになったと語っていた。また、新人看護師の方々は、今の悩みや体験していることが自分の将来につながっていくことを聞いて安心感を得たようであった。

ワークショップ5： 発達障害をもつ子どもの親の語りから



【コーディネーター】

三 浦 由紀子

(高知医療センター小児看護専門看護師、
46期生、修正8期生)

【企画の意図】

発達障害の子どもを支えるお母さんの体験についての語りから、発達障害という視点のみならず、家族、子育て、学校教育など、さまざまな視点から、みんなで語り合い「看護」を考えていく機会とする。

【話題提供者】

ま す だ 氏

(発達障害の子どもを支えるお母さん)

井 上 一 二 三 氏

(高知県立療養福祉センター看護部長、修
士13期生)

【話題提供内容の概要】

井上氏からますだ氏の紹介があり、ますだ氏から、お子さんが生まれてから、小学校に通う現在までの体験を語っていただいた。子どもの成長発達や障害への思いや、進路の選択をはじめさまざまな出来事に揺れながらも、常に未来を見つめ、子どものサポーターであり続けるますだ氏が、その子らしく生きていくための支援の一つとして作成されたサポートブックについてもお話いただいた。

【ワークショップでのディスカッションの内容】

参加者は、看護師や保健師、大学教員や大学

院生など14名であった。ますだ氏のお話から感じたことを参加者が語り、詳しく知りたい内容についての質問について、ますだ氏に語っていただいた。

障害の告知を受けた際の「ショック」「やっぱり、でもなぜ」という思いの中で、家族で原因を追及しないと話し合われたこと、障害や子育てへの思いが夫婦で異なる部分に葛藤したり、お子さんの進路選択など最終決定権は親であるため、夫婦で悩まれながらも支え合うという語りからは、家族の力を感じた。

お子さんの成長発達や社会生活への心配はありながらも、「できていること」を大切に視覚支援や構造化など関わりの手立ての一つとして作成されたサポートブックの実際についても教えていただいた。

ますだ氏の語りや参加者の皆さんとのディスカッションを通して、お子さんの可能性を大切にその子が参加できる方法を考え、その子の力、家族の力を信じて周囲が支援していくことが、社会の中でその子らしく生きていくことにつながるのではないかと考えた。

ワークショップ6： 研究方法としてのナラティブ・アプローチ



【企画の意図】

ナラティブ・アプローチは、哲学的な考えが基盤となっている。このワークショップでは現象学的な立場から、ナラティブ、すなわち「人の語りとは何か」についてその根源に立ち返って考えていく。その上で、研究方法としてのナラティブ・アプローチについて語り合う。

【話題提供者】

吉川 孝氏

(高知県立大学文化学部・准教授)

専門領域は哲学・倫理学。現象学派の実践哲学を研究テーマとしている。

哲学、とくに現代の倫理学の動向からナラティブに注目する意義について話題を提供する。

中山 洋子氏

(高知県立大学DNGL管理センター・特任教授、16期生)

専門領域は精神看護学。現象学的アプローチを取り入れてclinical judgmentの研究を行っている。質的研究方法論を概観しながら研究方法としてのナラティブ・アプローチの実際と課題について話題を提供する。

【話題提供の内容とワークショップでのディスカッション】

吉川孝氏からの話題提供：ナラティブは、

公平性や普遍性を重視する近代哲学（義務論、功利主義）が見逃してきた「生き方」に目を向ける手がかりになる。「生き方」は、倫理学にとって重要なテーマであるばかりか、看護実践の場面においても常に問われている。生き方への問いとして『水俣一揆：一生を問う人々』のDVDを上映し、最後に「ナラティブの拡張」というかたちで、音や絵画を提供して言語ではない語りの問題を提供した。

中山洋子氏からの話題提供：研究方法としてのナラティブ・アプローチに焦点を当て、哲学的な基盤とナラティブ・アプローチの系譜、語り・物語・Narrative Discourseと語りについて論じるとともに、実際に研究を行う上におけるナラティブ・アプローチの問題点について話題を提供した。

討論の中では、映し出される映像のインパクトと解釈について、実際にナラティブ・アプローチを用いて研究するときの研究者の課題についてなどが話し合われた。